

「神の義と御力の義」

(ローマ9・30〜10・4)

一、気をつけなければならない

私たち、特に日本人の特性なのかも知れませんが、一つのことを突き詰めて活動して行きますとだんだんと専門家集団になって行ってしまい、初心者が入りにくい雰囲気になります。これがかもし教会であつたら、初めて教会に来た方が「もう、あそこの教会には行きたくない」となるわけです。旧約の伝道者の書には、**「あなたに正しすぎてはならない。自分を知恵のありすぎる者としてはならない。なぜ、あなたは自分を滅ぼそうとするのか。」**(7・16)とあります。伝道者の書は「中庸」がいいと語っていますが、私もそう思います。

二、パウロが語ったイスラエル

今、お語りしたことは、30節、31節を読んだときに思ったことです。《それでは、どのように言つべきでしょうか。義を追い求めなかった異邦人が義を、すなわち、**信仰による義を得ました。**しかし、イスラエルは、**義の律法を追い求めていたのに、その律法に到達しませんでした。**》です。キリストの福音は、人間の知性に訴えて納得してもらえないような性質のものではありません。実の

ところ、それは無理なのです。《十字架のことばは、滅びる者たちには愚かであつても、救われる私たちには神の力です》(1コリ1・18)とありますように、一所懸命に語つても、愚かなことばにしか聞こえないものです。では、伝えることは無駄なのでしょうか。そんなことはありません。パウロは語っています。《そして、**私のことばと私の宣教は、説得力のある知恵のことばによるものではなく、御霊と御力の現れによるものでした。**》(1コリ2・4)と。

主イエス・キリストを信じている者が、御霊に押し出されて語る。これが、パウロの語り口でした。今一度、30節、31節をご覧ください。《9・30、31》これは、御霊に押し出されて、語ったことばです。私共が人間の知性で受け取ろうとしますと「義を追い求めなかった異邦人が義を、すなわち、信仰による義を得た。しかし、イスラエルは、義の律法を追い求めていたのに、その律法に到達しなかったのだと? 何だ、これは?」となるわけです。ですが、ここに神がもたらされた「**義に正しさ**」が語られています。ユダヤ人は神に熱心に仕えたいと願い、一所懸命に神の義を求めました。ですが、神に熱心なユダヤ人は、神の義に達することができませんでした。なぜでしょうか。32節で、パウロが語っています。《**なぜでしょうか。信仰によってではなく、行いによるか**

のように追い求めたからです。彼らは、**つまずきの石につまずいたのです。**》と。どういふことなのでしょうか。ユダヤ人は一所懸命に律法(すなわち聖書)を

守ろうと努めたからです。いいことじゃないですか。どこが悪いのですか? ですが、私たちが努力によってみこころを行おうとしますと、人は高慢になってしまふという性を持つています。その性とは、罪です。罪とは、神の前に私共が本来のべき状態でないことです。これは、創世記によれば、最初の人(アダム)においてそうだったもので、人間が何をしようと抜け出せない不思議な性質です。この、罪の問題を抱えつつ、義を追い求めて、律法(すなわち聖書)を守ろうとしても、そこには高慢がやってくるというのです。高慢とは「**私ができる**」という自信です。ひいては「**神の助けがなくても立派に生きられる**」という自信です。そこで分かるのは、神の子であり、神御自身が人となられた主イエス・キリストに対峙したパリサイ派のユダヤ人こそ、罪人の最たる姿であることです。だから、自らの行いをもって神から義と認められると信じて疑わなかったパリサイ人は、神の子主イエス・キリストにつまずいたのでした。33節です。《9・33》ユダヤ人にとって主イエス・キリストは、自分た

ちが信奉してきたことをぶち壊す教えであり、つまずきの石になりました。

三、パウロの願い・祈り

そこで、パウロが願ったことは、次のとおりです。10章1節です。《兄弟たちよ。**私の心の願い、彼らのために神にささげる祈りは、彼らの救いです。**》と。ユダヤ人が主イエス・キリストを信じて、行いによらないで神の義を受け取るというご計画を理解するのは、どう考えても不可能です。もちろん神にできないことはありませんが、何せ、熱烈なユダヤ教徒であつたパウロが救われたわけですから。しかし、パウロをして、**むずかしい働き**です。

そういうわけで、私がきょうお語りしたことを理解していただけたら、10章2節、3節は、そのままご理解いただけると思います。《私は、**彼らが神に対して熱心であることを証ししますが、その熱心は知識に基づくものではありません。彼らは神の義を知らずに、自らの義を立てようとして、神の義に従わなかったのです。**》と。

では、みこころにそつた熱心とはどんな姿なのでしょう。それは、主イエス・キリストを信じて、聖霊に導かれて歩むことです。聖霊は私共を「**神の御意思に従いたい**」という思いに導かれます。結果、喜んで主と主のことばに従うようになります。